

「ロシアのウクライナへの軍事侵略 帝国と国民国家」

ジャーナリスト 石川 一洋

只今ご紹介いただきました石川と申します。よろしくお願いいたします。

本日は時間を頂いておりますので、今の状況について私の思うところ、分析等を述べたいと思います。

去年ロシアがウクライナに軍事侵略をして、そして秋にはコーカサスのアゼルバイジャンとアルメニアでアゼルバイジャンが領土を取り返したという形になりまして、武力によって紛争が解決、終結の形になりました。その後先月に、パレスチナのハマスがイスラエルに侵攻しましたが、私は中東問題の専門ではありませんが、最初このニュースを聞いた時、逆ではないかと思いました。一般国民として多少知識がある方の常識として、ハマスがやるのはせいぜい自爆攻撃ぐらいで、強力な諜報機関と軍事力を持っているイスラエルがなんでこんなことになるのかと思いました。同時にハマスはなぜこのようなことをしたのかと思い、その結果として、今そういう状況になりつつありますけれども、必ず100倍返しで来るのが分かっていながら、何の目的なのかと疑問に感じました。

ただいずれにしてもロシアの軍事侵攻以来、武力の行使というもののハードルが下がっているのではないかと感じています。特にこのイスラエルとパレスチナの状況がどうなるか分かりませんが、アメリカの空母部隊が二つ、地中海に派遣されて、一番懸念していますのは今後イランがどう出てくるのかということにもなりますし、また、戦争が冷戦終結後も世界のどこかで行われていたわけですが、とんでもないことが起きているという状況です。つい数年前まではこのようなことが起きるとは思っていませんでしたが、起こり得るようなことになりつつあるというような、私は軍事の専門ではありませんが、そのような感じがしております。

今日は ロシアとウクライナを中心に、若干北方領土問題も含めてお話ししたいと思います。

一言で言うと、このロシアとウクライナの戦争、ロシアによるウクライナへの軍事侵略というものを、どう性格づければいいのかということですが、ソビエト連邦末期から、現地で取材してきた者の感覚としては、やはりこれはソビエト連邦という巨大な社会主義の帝国が崩壊したという大変動が1990年代にあったわけですが、30年が経過しましたが、その非常に大きな余震だと思っています。

ソビエト連邦が崩壊した時に、実はアメリカは、あの時ロシアとウクライナが戦争になることを一番恐れていたわけですが、それが30年経ってこうしたロシアによる侵略という形で吹き出してしまいました。つまりソビエト連邦という帝国が崩壊して、そこから新しい独立国家が生まれ、その一つのウクライナは、やはりネイションステーツ、国民国家、国民を基礎とする、ウクライナ人を基

盤とする国民国家を造ろうとしました。それに対してロシア帝国、ロシアという国はどうしても国民国家にはなれない、つまり自分の帝国の幻想というものにとられる、帝国の継承国です。この二つの国の衝突ということではないかと思います。

現在の戦況は皆様の方が非常に詳しいと思いますけれども、私は軍事は素人ですが、アフガニスタンの戦争やロシア国内ですけれどもチェチェン紛争とかも見ておりました、なんというか、こんな戦争が今 21 世紀に起きるのかという感じがしております。

南部の方のザポリージャ、それからドネツク、それから北部のハリキウ、ベルジャンシクですが、日本列島を南北に行ったくらいの 1000 キロくらいのところで、その全てではありませんが、常に砲弾が飛び交っています。砲弾が飛び交って、塹壕、お互いに穴を掘ってそれに耐えるというところで行くと、非常に第二次世界大戦以来の戦闘、古色蒼然たる感じがします。そこに今度はドローンがお互いに飛んで、それが非常に残酷な映像と言いますか、塹壕に立てこもるお互いに、兵士の上から爆弾をドローンが落としてくる、それらがさらに SNS で毎日アップされてくるという状況が続いていて、双方の戦死者というものがどのくらいになるのかわかりません。アメリカの推定ではウクライナが 7 万人、ロシアが 12 万人というのが確か 2 ヶ月くらい前に出ていましたが、この人命というものを軽視した戦いが 21 世紀の前線で行われています。ウクライナの反転攻勢が 6 月から始まって、南部では徐々に押し込んでいるところもありますが、東部のドネツク周辺では逆にロシアが攻勢をかけているということで、全体としてはあまり動いていないという状況が続いています。

それで北方領土につなげる前に、ロシアはどういう戦争をしてきたのかということについて話したいと思います。20 世紀には日露戦争がありますが、あとはドイツとの戦争です。二つの世界大戦で、その根幹を成すのはドイツとロシアが引き起こしたと言うか、主役のプレイヤーだったということです。少々遡って 19 世紀、ロシア帝国が領土を拡大した 19 世紀の戦争を見ると、実に色々なところと戦争をやっています。

一つは南の方でペルシャとコーカサスをめぐる争い、それからトルコはロシアとの間で非常に長く戦争を繰り返していて、大体 14 回行われ、ロシアが 13 勝 1 敗、1 敗はクリミア戦争です。それからもちろんナポレオンとの戦争、フランスとの戦争、それから 19 世紀になると、その当時の超大国、海洋大国である大英帝国と陸の帝国であるロシア帝国の覇権争いということでイギリスとの戦争になります。余談ですが、アメリカの独立戦争と米英戦争は、ロシアとしてはアメリカ側を側面から支援しています。これもやはりイギリス、海の覇権国家と陸の覇権国家の争い、それからあと、主には 18 世紀が多かったのですがスウェーデンとの戦争、スウェーデンというのは非常に強力な王国で、もしも 18 世紀の初頭にピョートル大帝対カルロ 12 世という両方の英雄の戦争でスウェーデンが勝っていたら今の世界地図はおそらく変わっていたでしょう。スウェーデン王国はおそらく今のウクライナあたりまで入ってきて、ロシア帝国による西への拡大はおそらく挫折したことでしょう。そのスウェーデンとの戦争、それからロシア帝国の中への組み込みになりますが、コーカサス

における戦争、これは主にチェチェン人、ダゲスタンのムスリムの土地を版図に組み込んでくるという中での戦争、これが50年ぐらい19世紀の間続く、それからこの当時ロシアはポーランド、フィンランドも版図の中に収めていたということで、ポーランドの反乱があります。更に、中央アジアへの領土の拡大に伴う、直接の戦火は交えませんでしたがいギリスとの間のグレートゲームということで、19世紀のロシアは領土を南、西、東へと拡大していったということです。これはロシアの文豪のトルストイ、皆様はよく知っていると思いますが、最近大学生にドストエフスキーとかトルストイとか言っても知らない人が多いので、今日は年齢層に合わせて言えます。

意外なことにドストエフスキーは戦争を描いた作品がありません。やはり社会の矛盾について描いていました。ところが貴族階級出身のトルストイは、最後は戦争に絶対反対、絶対平和主義を唱えますが、若い頃はコーカサス戦争とかクリミア戦争に従軍して、作品の中で戦争というものがよく描かれていて、例えばナポレオン戦争、祖国戦争ですが、これは「戦争と平和」、コーカサス戦争は「カフカスの虜」、クリミア戦争は「セヴァストポリ」、ロシアトルコ戦争は「アンナカレーニナ」、日露戦争は小説ではないですが「戦争反対論」、考え直せという論文を発表したということで、トルストイの生涯をたどってみると、ロシアは19世紀にいかにも多くの戦争をしてきたかということが分かると思います。

この中で、今の状況、今のロシアによるウクライナ侵略、そしてロシアとヨーロッパ、それからアメリカとの関係に最も似ているのは、原因とか状況とかは違いますが、大国間の関係が似ているのはクリミア戦争です。クリミア戦争はロシアとトルコの戦争ですが、それに対してトルコの代わりに当時の大国、覇権国家であったイギリスとフランスが支援して参戦するという事でロシア帝国は結局敗北しました。

このクリミア戦争に対してトルストイは、最も激戦地であるクリミアのセヴァストポリに從軍して「セヴァストポリ」という連作を書きました。これも今の状況によく似ていますが、英仏連合軍がクリミア半島に上陸しまして、1年近くセヴァストポリを包囲しました。包囲戦を行って最後陥落することによってロシア帝国は敗北しましたが、1年余りにわたって塹壕に立てこもって守るロシア軍に対して、英仏連合軍は海上と高台からの砲撃を浴びせ続けました。クリミア戦争と言いますと、赤十字のナイチンゲールが從軍しましたし、当時の新聞がこぞって特派員を派遣することによりヨーロッパの有力紙の一面を飾っていました。

トルストイを人道主義、トルストイ主義と言いますが、私としては案外冷たい人間ではないかと思えます。ドストエフスキーは主人公に感情移入がありますが、トルストイはちょっと突き放したような状況を俯瞰してみるというところがあって、例えばこのセヴァストポリにおいて、二人の将校が塹壕の中で砲弾を浴びて、一人が死んで一人が生きる、わずか2秒間の描写というのを書いているわけです。読ませていただきますと、「けれどもその瞬間に彼の目は我が身から三尺と離れていないところからくるくと回っている爆弾の光る導火管とばったりと出会った。恐怖、他の一切の思想、感情を押しつけてしまうような冷たい恐怖が、彼の全存在をひつつかんだ。彼は両手で顔を覆

った。また一秒が経過した。一秒であるが、その間に感情、思想、希望、回想の一大世界が彼の脳裏をひらめき通った。」その後いろいろ描写がありますが、例えばその前の晩にジプシー女と遊んだこととか、その女に100ルーブル貸したこととか、些細なことがばあーと頭の中にはいつてきます。更に、「最後に彼は石をはねのけるために懸命に身を伸ばした。途端にもう何一つ見えず、聞こえず、考えず、感じなくなりました。彼は弾片を胸の中に受けて、その場で即死したのであった。」という風に、なんと言うか非常に突き放したようなことですが、そういうことでロシア国内でもこうしたトルストイの小説を通じて、クリミア戦争というものの状況が伝わりました。ロシアにとっては、このクレミアのセヴァストポール、ソビエト連邦崩壊後、私は一度行ったことがありますが、軍港でなかなか外国人は入りにくく、行ってみると、僕の印象は、墓がやたら多い街だなと感じました。街の背後にある丘は、このクリミア戦争の時から墓がずらっと並んでいます。ロシアにとってみると、第二次大戦でもセヴァストポールの包囲戦という非常に悲惨な戦いで、最後は陥落して、またさらにそれを赤軍が奪い返すという戦いが行われました。だからプーチンにとって、おそらくセヴァストポールを攻撃されるというのは非常に痛いわけです。だからウクライナがストーンシャドウとかドローンを使ってセヴァストポールを攻撃するというのは、やはり黒海艦隊を押し込めるという意味と、ロシア社会にあのセヴァストポールが攻撃されたのかというショックを与えるという衝撃が大きかったと思います。

私が、クリミア戦争が似ていると言ったのは、このクリミア戦争の時のロシアと、ロシアについてのヨーロッパのコンセプト、捉え方というのが今とよく似ているのです。つまり、クリミア戦争が起きた時は、1948年の第二次フランス革命やオーストリア、ハンガリー帝国でのウィーンでの二月革命、進歩と民主主義というものがヨーロッパの中に広がっていました。それに対して、ロシア帝国は農奴制を維持して、保守反動ということで、保守反動のロシアと進歩のヨーロッパの戦いだという捉え方が、クリミア戦争においてはヨーロッパのその当時生まれてきたマスメディアというもので取り上げられました。風刺・戯画になります。ロシアを熊や八方に手を伸ばすタコに見立てたり、カイザーの帽子をかぶったロシア皇帝、専制君主ニコライ一世、というような絵がヨーロッパでとりあげられました。この進歩的なヨーロッパ対遅れた保守反動のロシアということが、そういうコンセプトが初めて広くヨーロッパの社会の中で受け入れられた戦争であったということが言えると思います。

ただこのクリミア戦争は若干、日本と日露関係も関わってしまっていて、ニコライ一世は、今のプーチン大統領と同様に30年以上ロシアを統治した専制君主ですが、プーチンと似ているのは、自分が皇帝になろうと思ってなった人間ではないのです。ナポレオン戦争を戦ったお父さんのアレキサンダー一世が亡くなりまして、お兄さんが即位を拒否しました。次男か三男でしたので皇太子ではありませんでしたので、皇帝としての教育を受けていなかった皇子が皇帝についたわけです。皇帝につくと、ただちにデカブリストの乱というロシアの民主化を求める青年貴族が蜂起するという反乱が起きて、それを徹底して弾圧して、そのことによって権力を固めました。

似ているというのは、プーチンも必ずしも自分がロシア大統領になると思ってなったわけではな

くて、1999年、エリツィンに指名されてなったわけです。なぜエリツィンがプーチンを指名したかと言うと、結局は自己保全なのです。プーチンであれば、エリツィン家の安全を保ってくれるということで、無名の KGB 出身の官僚だったプーチンを指名したということです。

ニコライ一世は30年間、ロシアを独裁的に統治したわけですが、ただ、日本との関係で非常に重要な決断をしました。条約、調印はアレクサンドル二世になってからですが、このニコライ一世の時代に日本とロシアとの条約交渉が始まりました。その中でプチャーチンというロシア側の全権代表が、その船で出航する時に、交渉方針を皇帝ニコライ一世が決めてプチャーチンに渡していました。この時にロシア帝政内部では、武力交渉論と平和的交渉論、いずれにしてもロシア帝国という巨大な帝国の力を背景にした交渉ですが、軍艦を派遣して大砲で脅してやるほうがいいか、それとも平和的に交渉をまとめた方がいいか、という議論が行われて、ニコライ一世は平和交渉論を採用しました。この時には、オランダからシーボルトとかを呼んで、日本の状況を聞いているわけです。彼らはこの時、ニコライ一世は何故日本と交渉したのか、もちろんアメリカやイギリスが日本に開国を求めているという情報、それに乗り遅れてはいけないということもあったわけです。丁度この頃、東では大清帝国に対してロシアは当初カムチャッカまで、無人の野、清の権益が及ばない北のところを17世紀までにとって、そこから清の衰えに乗じて徐々に徐々に南下して行く。1850年代に、今のハバロフスク、ウラジオストックをロシア帝国領とする。まだシベリア鉄道がないので、極東シベリアの開発のためには、今後は日本と交易をしたい、だからロシアにとってみれば、交渉の目的は、日本と外交関係を樹立して交易することでした。まだ交渉が始まる前に、国境線は択捉島とウルップ島の間でよい、我々の交渉ラインはここだ、ということニコライ一世は訓令の中で言っております。つまりこれは日魯通好条約ですが、ロシア側もそれ以前において、択捉までは日本であるという認識をしていたし、ニコライ一世は領土、国境線の画定ということを日本側に持ちかければ、日本側は交渉に応じざるを得ないということで、この国境線の交渉を持ちかけたわけです。

日魯通好条約が結ばれて、その第二条に、今より後、日本国とロシア国との境は択捉島とウルップ島の間にあるべし、これは私がモスクワにある外交史料館、ロシアというのはそういう点はしっかりしたところがあって、過去の文書はかなり保存しています。本条約は、日本語、ロシア語、それからオランダ語、この三つの言語で書かれています。非常に綺麗な条約ですが、残念ながら日本のものは関東大震災時に原文は焼失してしまいましたので、今残っているのはモスクワのものだけだということです。

この日魯通好条約は日露双方に意義があったわけですが、その当時の大国ロシアと平和的な交渉で国境を確定したということ、ロシアの意義というのは、極東シベリアの開発のために、対岸にある日本との交易の道を開いたということ、つまり私が申し上げたいのは、今につながる日露関係の原点みたいなものがこの条約にはあるということです。もちろん我々にとっては、関税を決められないような不平等な要素というものは、他の条約と同様あったわけですが、いずれにしても平和的な交渉で日本の領土を国際条約の上で確定したということ、同時にロシア帝国にとっても極東シベリアの開発のために日本との関係を定めたという重要な意義がありました。だからこの後、プチャーチン、向こうの全権代表は非常に出世し伯爵の位をもらいました。そのプチャーチン家の紋章は、

次の皇帝アレクサンドル二世からいただくわけですが、ロシアの水兵と日本の侍が立っていて、その間に船が書かれています。彼らの船は安政の大地震に伴う大津波で沈没しましたので、日本で作ったヘダ号という船になります。つまりロシア帝国としても、この日魯通好条約というものを非常に高く評価していたということがこれをもってしてもわかります。

あともう一つは、この条約で非常に面白いのは樺太についてです。樺太については、どちらの領土とすることもなく、境を定めず雑居の地とする、つまり今で言うと何と言えればいいのか、その後そういう条約を領土関係で見たことがありません。共同統治という共同で何かするということになりませんが、勝手にそれぞれ暮らすという感じです。お互い入って行って開発してよいというなかなか面白い考え方で、今であれば画期的だと思います。当時の日本の国力とロシア帝国の国力、その当時ロシア帝国は人口が伸びていましたから、入植の勢いは違って、樺太については日本は持ちこたえることができないということで、1875年に樺太千島交換条約を定めて、樺太と千島を交換しました。その後、日清戦争の後、ポーツマス条約で樺太南部は日本に割譲され、これがそのままソビエト連邦においても引き継がれて、日本とソビエトの間の国境ということで国際的に合法的な国境ということが続いてきたわけです。ではどうして今、北方領土問題というものが発生したのかということですが、これはやはり第二次大戦の勝利者であるスターリンというソビエトの独裁者がいましたが、第二次大戦において領土を拡大したのはソビエトのみです。領土不拡大の原則という大西洋憲章がありますが、西においても東においても領土を拡大しました。西においてどこを彼は拡大したのかと言いますと、一つはバルト三国のエストニア、リトアニア、ラトビア、つまり第一次大戦でロシア帝国が崩壊した後、独立した3カ国をナチスドイツとの密約において併合したところです。それからこれも、全てナチスドイツ、すなわちヒトラーとスターリンの密約である独ソ不可侵条約に伴う秘密文書がありまして、その中でモロトフとリップントロップという両国の外相の密約があって、つまりここまではソビエトですよ、ここまではドイツですよと線が引かれた地図があるので。それに基づいてスターリンは領土を拡大しました。その一つが今のウクライナの西部、当時のポーランドです。ポーランドの一部だった今のウクライナ西部を、ソビエトの領土とする。だから1939年9月、第二次大戦がドイツのポーランド侵攻によって始まりました。それからドイツの侵攻から一か月以内に今度は東からソビエトがポーランドの領土にはいって、その密約通りに今のリビウの地域を占領する。さらにもう一つは今のモルドバです。ここもその時ルーマニア領でしたが、それをソビエト連邦が併合する。だから第二次大戦というのは変わった戦争で、始まった時はまだ、ソビエトも日本もアメリカも参加していませんでしたが、ソビエトはどちらかと言うと、ナチスドイツと協力して領土を拡大していました。だから独ソ戦が始まる1941年6月までは、どちらかと言えばスターリンはヒトラーとの協調に舵を切っていたわけです。

スターリンは確かに西においても領土を拡大し、東においても我が北方領土を始め領土を拡大しました。ただ、これが果たしてソビエトと言いますか、ロシアと言いますか、国益にあったのかどうかというのは疑問なところがありまして、もしかしたらプーチンもそのように考えているのかもしれませんが。ひとつはバルト三国とウクライナ西部、これはどういう土地かと言うと、全くロシアではない土地なのです。特にウクライナ西部、これはウクライナの中でもロシアには一度も入ったこ

とがありませんので、反ロシア的な秩序というものが満ち満ちているところを自分の領土に入れてしまったわけです。これが一つの遠因となって、ソビエト連邦が崩壊する一つの原因となりました。もう一つは日本との関係です。ニコライ一世が、彼も帝国主義的な野心のもとに日本との条約を結ぶわけですが、その当時のロシア帝国の国益を考えて、領土においては日本との間で協調してもいいから外交を開くべきだという、ロシアにとっての戦略的な利益を考えたわけです。スターリンはどちらかと言うと領土を拡大すべきだ、領土を取るべきだと考えました。特に社会主義者であるはずですが、日露戦争の復讐ということを開戦の理由にしていくわけです。さらに、このシベリア抑留という60万人という日本兵が、何の理由もなくシベリアに長い人では10年以上にわたって抑留され、6万人近くがソビエト各地で死亡しました。つまり、領土は拡大したが、この日本との信頼関係という基盤を決定的に失ったわけです。そうすると、本当はロシアにとって一番良いのは、おそらく松岡洋右の外交だと思います。何かというと、ベルリンと東京と連携する事なのです。つまりユーラシアの帝国であるロシアと、その西と東、二つの非常に優秀な民族のある日本とドイツ、この二つと良い関係を保つとことが、ロシアにとっては本来のはずであるのに、その基盤を崩してしまったということです。

だからウクライナの今の問題と、北方領土というのは遠い問題ですが、実はスターリンというところで結びついているわけです。もう一つは、北方領土について言えば、占領した後に入ってきたソビエト人の中にはウクライナ出身者が大変多かったのです。つまりウクライナでは第二次大戦で荒れ野原となって食料不足となり、ウクライナの内地から北方領土に移住してきて、漁業をしたこともないというのに、その当時住んでいた日本人が一から教えたということです。

この北方領土問題ということについて言うと、もう一つはやはり大国間の妥協であるヤルタ会談です。アメリカのルーズベルトもかなり絡んできています。2月2日から11日まで開かれてほとんどヨーロッパ問題なのですが、最後に極東問題が話し合われ、スターリンは日露戦争で日本が獲得した権益を全てソビエトによこせという、極めて帝国主義的な要求をして、それをルーズベルトはのんだのです。どういうことかと言うと、樺太南部の返還、これは日本によって奪われた、考えればそれはそうかも知れない。だけどそのほかに、大連港とか満鉄などの鉄道の権益も全部ソビエトによこせと要求していたわけです。それをルーズベルトはのみました。なぜかと言うと、その当時は対日参戦を条件としてそれをのむということです。つまり対日参戦の褒美としてスターリンにルーズベルトはそれを与えたわけです。非常に帝国主義的な野望ということですが、非常に残念なのは、当時日本の諜報機関が海外にもスウェーデンの小野寺大使とかいらっしゃって、このソビエト参戦の合意という情報をつかんで大本営に送ったわけですが、それが活かされることはなかったのです。

ということで、結局このヤルタの後、東京大空襲、それから沖縄をはじめ各地の空襲、4月からの沖縄戦、そして広島、長崎の原爆と同時にソビエトの侵攻ということになっていきます。ソビエトによる四島占領、この時も実は占守島の戦い、これは日本軍が本気に戦っていたらおそらく勝ったわけですが、大本営から戦闘停止命令がありました。カムチャッカ半島から千島列島を南下するソビエト軍もウルップ島で止まりました。ウルップ島で止まって、つまりこの先行っていかどうか

わからない、あるいはアメリカ軍がいるかもしれない、そこで止まりましたが、北方四島にはそちらではなくてサハリンからの海上からの部隊が、まさに8月15日から2週間経った後出港して、占領したわけです。その中の、特に歯舞群島に至っては、ミズーリ号で降伏文書に調印した後の3、4日に占領しているのです。

ここで北方領土と今のウクライナの関わり、スターリンを通じての関わりというのを説明しましたが、1990年にウクライナを取材したときのことを紹介します。

「リボフ州では、大きな銅像から小さなレリーフに至るまで、1500あったレーニン像のすべてを撤去しました。どうしてウクライナの人々は、これほどまでにレーニン像を憎むのでしょうか。広場から撤去されたレーニン像を探すことから始めました。まず見つけたのはレーニン像の台座です。リボフ市の道路工事事務所のゴミ置き場に、要らなくなった資材と一緒に置かれていました。レーニン像も、初めは野ざらしにされていましたが、見かねた人が倉庫の中に移しました。レーニン像が建てられた1952年は、リボフで共産主義政権が確立した年でした。作者は有名な彫刻家エルグールフです。しかし、去年の春の地方議会選挙で、民族派が共産党に圧勝してからレーニン像の扱いは180度変わりました。」

私が強調したいのは、ソビエト連邦を私が取材したのは1990年の秋、10月です。実際にレーニン像が撤去されたのは1990年4月、まだソビエト連邦は存在して、ソビエト共産党も存在して、KGBも存在する中で、この西部ウクライナの民族主義の諸君はバルト三国よりも早くこのレーニン像を撤去しました。地方議会選挙でウクライナ民族主義者が勝利して最初にやったのが1500ある全てのレーニン像の撤去でした。この倒れたレーニン像を見た時、僕は初めてソビエト連邦はもしかしたらこれはやばいのではないかと思いました。まさかその1年後にソビエト連邦がなくなるとは想像もしませんでした、これはかなりたいへんなことになっている。かなりな地殻変動と言いますか、起きていると感じたのがこのウクライナ西部のリボフでの取材でした。

つまり、このスターリンが領土を拡大したということによって、異質なものを帝国の内部に取り込んだ。それは内から帝国を崩壊する力となっていった。もしもこれが、第一次大戦まではここはポーランド領ですから、ポーランド領のままだったら、あるいはバルト三国を勢力圏としても社会主義国家として独立させていたら、ソビエト連邦がこのような形で崩壊したかどうかというのはわからないと思います。あの体制には無理がありますから、いつかは崩壊したとは思いますが。

今のウクライナへのプーチンの侵略戦争ですが、日本は国際秩序の根幹を揺るがす暴挙ということで立場を明確にしています。この岸田総理の判断、一番僕は分かりやすいというのは彼が今年1月アメリカで行った講演です。というのが非常に明確に書いていると思います。ちょっと読ませて頂きます。

「この侵略を目の当たりにして私はこう考えました。これは歴史が変わる瞬間である。日本にとっても正念場だ。この侵略行為にいかに対応するか、国際社会の将来がかかっている。力による一

方的な現状変更を許せば、世界のどこでもこのようなことが行われてしまう。自由と民主主義を守るために日本は行動すべきだ。従来の対露政策を大転換して、厳しい対露制裁を導入することを決断した。日本が対露制裁措置に加わったことで、ロシアのウクライナ侵略との戦いはグローバルな性格のものに変わった。」ということです。

これは大きな政治判断ということで、どう展開したのか、いろいろありましたが、要はソビエト連邦崩壊後に日露のパートナーシップを築くことによって、そのどこかにおいて北方領土の解決を目指していくという併行、一つは日露関係を含めて、一つは北方領土問題の解決を目指すということでした。なかなかうまく行かなかったとは言えますが、その方針を転換するということです。それに対してロシアがどう出るか、日本を非友好国として指定して、平和条約交渉、ビザなし交流を一方的に合意を破棄するというので、残念ながら今の日露関係では現状においては今後ウクライナ戦争がどういう形であれ終わるまでは、なかなか見通しがつけにくい、そういう状況です。

ここからはロシアというのはどういう国なのか、ウクライナというのはどういう国なのかというのを説明したいと思います。

ロシアというのは典型的な唯一の残った大陸の帝国です。ウクライナの民族主義の諸君は、ロシア人の顔を剥くとモンゴル人の姿が現れると言っているわけですが、これは別の面でなんとなく本質を突いているところがあります。モンゴル人も、僕は別に悪いと思わない、非常に素晴らしいとは言わないけれど、あの当時としては極めて有能な帝国であったと思います。ロシアは二つの顔があります。一つはキリスト教、正教、東方正教の盟主という顔、もう一つはモンゴル。モンゴルのスキタイ、匈奴、フン、ユーラシアの草原に現れた草原の帝国の継承者、この二つの姿を持っています。つまりロシア帝国というのは、北の方でモンゴルの後をなぞって広がっていったということです。そうでなければ、モスクワ大公国というのは今のポーランドくらい、あるいはウクライナよりちょっと小さいくらいの領土しか持っていませんでした。イワン雷帝というのは実はジンギスハンの子孫の娘と意図的に結婚しています。つまり当時にはジンギスハンの血が入るということは、草原においては名誉なことだったのです。

そうしたロシアですが、20世紀のロシアは一言でいえば革命と戦争の世紀、革命をするか戦争をするか、どちらかをやっていました。つまりロシア帝国は、専制、正教、国土を三原則として、ロシア史上最大と言いますか、世界史上最大の領土を一番大きいときには持っていた帝国なのです。ところが、それまで正教、宗教というものを国是としていた国から、無宗教、反宗教、国際共産主義、一党独裁という体制に変わりました。それがさらに崩壊して、新生ロシアということで、当初においては民主主義、市場経済、法治国家を目標としていました。だから二つの戦争、世界大戦と二度の国家崩壊と、国の姿、国体が根本的に二回変わっているのです。

日本もさまざまな劇的な20世紀を経たわけですが、我々においては君が代という国歌は変わっていないわけですが、それに対してロシアは、20世紀の間に少なくとも5回国歌が変わっています。ロシア帝国の国歌は、神は皇帝を救いたまえというもので、それがソビエト連邦になって最初の国歌は

インターナショナルです。つまり、国際共産主義と言いますか、国家の存在を否定する国の歌を教えました。ところが第二次大戦で、独ソ戦でソビエトが大敗北しました。そこでスターリンは何をしたかと言うと、それまで弾圧していたロシア愛国主義を復活させ、ソビエトの枠内でこの偉大なロシアという考えを復活させたのです。これがソビエト時代の国歌ということになって、そこで偉大なロシアを永遠に結びつけたわけです。自由な共和国の揺るぎない同盟を、偉大なロシアは永遠に結びつけたという言葉が入ってきます。つまりソビエトの中でロシア愛国主義というものが第二次大戦において復活したのです。これが今のプーチン主義の一つの源流となるわけです。

ソビエト連邦が崩壊して、エリツィン大統領が新生ロシアになり、新しい国歌を決めようとして、メロディーはグリンカのオペラの「皇帝に捧げた命」の中の曲にしましたが、歌詞が決まりませんでした。どんな歌詞にするかと国民に募集しましたが、議論が起きて決めることができませんでした。だからエリツィン時代のロシアの国歌には歌詞がないのです。

プーチンが大統領になって最初に何をしたかと言うと、これは非常に今のプーチンの象徴的な所なのですが、ソビエト時代のメロディーに戻してそれに新しい歌詞をつけたのです。ソビエトの社会主義的な歌詞ではなくて、今のロシアについての愛国的な歌詞をつけたという、つまり愛国主義を国家イデオロギーとする今のプーチン体制が今のロシア国歌に象徴されるわけです。なぜソビエト時代に戻したかと言うと、これはプーチンにとっては第二次大戦における勝利というものを絶対視する、それをプーチン体制のイデオロギー的な基盤とするということを表しているわけです。

ただ、20世紀のロシアを考えたとき、やはり悲劇的な世紀であったということは理解しなければいけません。ロシアの人口の年代別構成を見ると異様なギザギザがあります。本来は富士山型になっているはずですが、工業化が進めばこれが釣鐘型になる、というのが普通の人口グラフです。異様なギザギザ、これが第一次・第二次大戦での影響を受けていますが、女性の人口が特に第二次大戦以降において多くなっています。つまり成年男子が、如何に第二次大戦において死んだかということです。ソビエト全体で死者2600万人ですが、ちょっと信じられない数字です。日本は全体で380万人、ドイツが630万人くらいに対して2600万人の数字はあまりに過剰すぎるのではと思っています。というのは当時のソビエト全体の人口が2億人ですから、2億人のうち2600万人とはとてもじゃないが信じられません。けれども、特に独ソ戦においては、甚大な人的犠牲を払った戦争だったということは言えると思います。ところが1930年代においては大きな戦争をしてないのに起きています。これはスターリンの独裁体制における粛清であるとか、あと大きかったのは集団化です。農業集団化として、コルホーズ、ソホーズで集団農場作れというのは綺麗事ですけど、要は農民階級の撲滅ということで、飢えて死んだ人が今のウクライナを中心に非常に多いのです。ウクライナだけではないのです。私はロシアに何年も暮らしていますから、どうしてこれだけ緑の多い、水のあるところで飢え死にさせなければいけないのか不思議に思います。戦争が起きたらわからないでもないですが、内戦であるとか農地が荒れ果てて使えなくて、でも戦死ではないのになんでこれだけ死ぬのだ、黙っていても生きてくるのではないかとも思います。これは種籾まで奪ったと言われていています。植える種籾もないということで、カザフスタンとか他の遊牧民に対

しては家畜を奪ったそうです。ソビエト体制の脅威になるということで農民階級を撲滅したというのがこの30年代の落ち込みです。いかに過酷な時代であったかということが分かります。

次はウクライナです。ウクライナはということかという、実は今朝（10月30日）おはよう日本という番組で申し上げましたが、今ザポリージャが一つの反転攻勢の焦点となっておりますが、ここは実はウクライナの歴史において非常に重要なところなんです。どういうところかと言うと、ウクライナコサック、ザポリージャコサックという非常に強力な自由独立農民武装集団、若干汚い言葉で言うと野武士の連合みたいな組織が3世紀にわたって存在し、その中ではいろいろあったのですが、自由と自治を根本として、どこにも属さないということがありました。時にはポーランドと戦ったり、時にはオスマントルコと戦ったり、時にはロシアとオランダの狭間にあったりとか、とにかく自由、民主主義における自由とは違いますが、誰にも影響されない自由というものを今のザポリージャのドニプロ川の流域、川中島を根拠地として自治組織、コサックが存在しました。このコサックがポーランドにつくのかロシアにつくのか、あるいはトルコにつくのかということで、それぞれの列強が駆け引きを繰り返したわけです。

ウクライナは豊かな中原ですけども、13世紀以降においてはこれを統一した国家というのはありません。西はかなり長い間ポーランド、リトアニアの領土でした。東はじわじわとロシア帝国が近づいている。南においては、クリミアはオスマントルコを宗主国とするクリミアハン国です。これは実はモンゴルの子孫、バツの子孫、直系なんです。だから、1786年ロシア帝国で最後のハンが服従しましたが、これが形式的に言うと最後のモンゴル帝国の末裔が滅んだということなんです。その後はオスマン帝国に臣従していたということでクリミアハン国です。こういう強い国の間に立って、ザポリージャコサック、ウクライナコサックというのは自治権というものを維持していた。それが大きく奪われていききっかけとなったのは、実は先ほど申しましたロシア帝国ピョートル大帝対スウェーデンのカルロ12世のヨーロッパ、東ヨーロッパにおけると言いますか、この辺りにおける関ヶ原とも言えるポルトアの戦いです。ピョートル大帝は、これ以前においてカルロ12世との間で戦争していますが、どちらかといえば負けていました。負けていたんですが、北方戦争と言いますから、今のサンクトペテルブルグをつくる、それに対してスウェーデン王国は、そこに対して出撃しフィンランドとかを服従させる。そこでの争い、だから北方戦争と言いますが、最後の決戦は何とウクライナのドニエプル川流域のポルタワという所で行われて、この時にコサックが分裂しました。コサックのマゼッパという頭目がカルロ12世につく、それに対してかなりの部分のコサックは、ピョートル大帝につく、この戦いでピョートル大帝は圧勝する、最後の決戦で圧勝して、カルロ12世とマゼッパはオスマントルコに敗軍の将として逃げたんです。この戦い以降、ロシアはドニエプル川左岸を支配下におさめて、非常に強力だったザポリージャコサックの自治権が徐々に縮小されていって、ついに18世紀後半には完全にロシアに服従させられてしまいました。

だからウクライナ人にとっては、このザポリージャのコサックの自由と自治というものがロシアによって失われたという記憶、自由が失われたという記憶が非常に強力に残っているんです。その回復、自由の回復というものがウクライナの独立運動の一つの基礎となっています。ウクライナ

は 20 世紀になり、独立を求めての戦いということで、やはりロシア帝国が第一次世界大戦の中で 2 月革命、それからレーニンによる 10 月革命、私は革命と言うか、これは 10 月のクーデターだと思いますが、いずれにしてもソビエト政権が樹立する過程において、ウクライナは一時独立を果たしました。しかしそのウクライナもいろいろな勢力があつてまとめることができず、結局、ソビエトのボルシェビキ社会主義政権によって呑み込まれてしまいました。つまりソビエトの中の、ごく一部のウクライナということになったわけです。

それが 91 年まで続きましたが、一つ強調したいのは、実はウクライナ、あとベラルーシ、この 2 ヶ国は国際連合の原加盟国なのです。私はソビエト連邦に行つたことがあります、ソビエトには何の主権もなかったのです。ソビエトという中央集権的なこと、国家の中でソビエト連邦とウクライナとベラルーシ、それぞれウクライナ社会主義ソビエト共和国ですかね、国連の原加盟国になっています。これはスターリンが、我々は多大な犠牲を払つたと言い、もう一つは建前を言いました。ソビエト連邦はそれぞれ自由な共和国の連合である。だから俺の輩下も国連に入れろ、票数を増やせという要求をして、その結果、ウクライナとベラルーシについてはアメリカも認め、原加盟国になりました。

今のウクライナについてですが、これはロシア帝国崩壊後の短い独立ウクライナを復活させたということと、ソビエト時代のウクライナ社会主義ソビエト共和国が独立したという二つの側面を持って、イデオロギー的にはロシア帝国のあとのウクライナの復活という形をとっています。国歌の中では、最後のコサック、コサックの士族であることを示しています。我々の身と魂を自由のために捧げ、我々はコサックの士族であることを示そうということが国歌にも歌われているわけです。もう一つのウクライナの第二の国歌、草原の赤いカーリーナという歌がありまして、カーリーナという赤い実をつける植物、これがウクライナの象徴と言われている植物で、草原の赤いカーリーナという歌は、今のロシア軍と戦うウクライナ人、その前から非常に広く歌われているという歌でして、パンクロックグループのリーダーのフリーブニックという方が、去年の 2 月 24 日、自分のスマホで赤いカーリーナを歌っているところを撮って、自分は今から国土防衛隊に志願する、ということで歌って、それを投稿して、それに対して次々とウクライナの人たちが自分もという事で歌を合わせていきました。 Y o u T u b e で再生回数が 3 0 0 0 万回以上ということで、最後はピンクフロイドもこの歌を歌って演奏しました。

この歌は実は第一次大戦の時に生まれました。ロシア帝国と戦うオーストリア、ハンガリー帝国輩下のウクライナ人部隊がありまして、そこで歌われた歌がこの草原の赤いカーリーナで、何を意味しているかということ、先ほど申しましたザポリージャコサックの自由を回復させよう、今は草原でおれているけれども、この赤いカーリーナをもう一度掲げてウクライナの栄光を取り戻そうという歌です。

なぜプーチンが侵略戦争を決断したのか、私は今も色々考えているわけですが、一つは安全保障上の理由、これは大きく言うと、ソビエト連邦崩壊後の N A T O 拡大、ウクライナが N A T O に入

る怖れというものが大きな背景としてはあると思います。ただ直接の原因としては理に合わない。なぜかと言うと、ウクライナが直ちにNATOに入るような状況ではなかったし、私はこの戦争が始まる前に、ウクライナの安全保障の専門家、ロシアの安全保障の専門家ともZOOM等で話をしていた、彼らのうち、ドンパスに限定的な介入はあるかもしれないけど、このような本格的な侵略戦争があるということを予想した人はいませんでした。どういうことかと言うと、つまりそんなことをすれば、一つアメリカを困らせるのにウクライナをぶん殴るのは理屈に合わないということです。軍事侵攻すれば、NATOの団結、厳しい制裁、アメリカの利益となりロシアの国益にならない。これはロシア側が言っていたことです。ロシア側の安全保障の専門家が私に言っていたことです。つまり軍事侵攻すると起こり得るアメリカの対応というのは彼らも分かっていたということで、侵攻が始まった後、お前が言っていたことと違うではないかと言ったら、彼は正直言って良い意味でなくショックだったと言ってるわけです。ロシアの安全保障の政府寄りの専門家がそう言っていたのです。そうすると、安全保障上の理由というのは理屈に合わないということです。

もう一つ、プーチンの心情として、非常に近いのは、プーチンはさまざまな論文に書いていますが、ロシア人とウクライナ人は同じナロードだということです。あの論文を見た時に、ソルジェニーツィンと似ているなと思いました。ソルジェニーツィンはソビエト時代の反体制作家で反ソビエトを貫いた人ですが、ロシアの愛国者なのです。大ロシア主義、彼は中央アジアやコーカサス三国はロシアではない。ついでに言うと、ソルジェニーツィンは、北方四島はロシアではないし、早く日本に返すべきと言っていました。けれども、ウクライナとベラルーシとロシアは、一本の木から分かれた3本の枝である。この3本の枝を、生木を裂くように分けるのはやめてくれということ、ソビエト連邦崩壊前に、ロシア改革への提言書で書いています。この心情というものは、プーチン大統領の、ウクライナ人とロシア人は同じナロードだ、ウクライナの主権はロシアの協力においてのみ発露される、というような独りよがりのロシア主義的な考えに通じてあるというのがプーチンの理由の一つになっています。

もう一つは、これは私の直感と言いますか、私の感覚ですが、プーチン体制内部に、大ロシア主義とはまた別に、孤立的な反欧米的な保守グループ、対外的には無名の強硬派が存在します。私は先ほど述べた安全保障の専門家の方々とは、意見は対立しても共通の話し合える基盤があります。これをしたらロシアは不利だろう、制裁を受けることはロシアにとって不利になるだろう、そういうことはお互いに共通にあります。だからインタビューとか対話していても、意見は合わなくても相手の考えていることは、ある程度理解できる場所がありますが、この孤立主義保守グループは違うのです。欧米と統合しようとしたロシアは間違いだった、欧米との関係が悪くなれば悪くなるほど、真実のロシアを取り戻せることになる。だから制裁結構じゃないか、欧米から切り離す、ロシアを孤立させると言うのなら、それはそれで結構ではないか。その方が本来のロシアの姿を取り戻せる、という考え方、非常に強硬な、反欧米的な考えというものが、全体ではないけれども確かに存在する。こういうものの影響力というものがあつたのかもしれない。

次はソビエト連邦の崩壊についてですが、この20世紀の大事件、ここに書いたソビエト連邦の中

には 15 の社会主義共和国がありました。その 15 というのは必ずしも一様ではなくて、ソビエト連邦の原加盟国とも言うべきスラブ 3 ヶ国、ロシア、ベラルーシ、ウクライナ、それに次にコーカサスの 3 ヶ国、さらに中央アジアの 5 ヶ国ということでロシア帝国の版図に入れていました。さらに第二次大戦に至る経緯の中で、いわばどさくさに紛れてバルト三国をソビエトの中に入れました。だから中核は、やはりスラブ 3 ヶ国であったわけです。その 1991・12・8 の 3 ヶ国の合意については覚えています。朝モスクワに出張に行っていて、モスクワ支局の方から、石川、至急支局に会い、ソビエト連邦が崩壊した、もうないと言われて意味が分かりませんでした。今、いろいろソビエト連邦はなぜ崩壊したかという番組を何度も作って、それ嫌になります。この時は崩壊してるの明白だ、なぜわからなかったんだと、自分の愚かさが分かるようで嫌なのですけれども、それだけやっぱり、ソビエト連邦という存在は頭の中で大きかったと思います。だからぐちゃぐちゃになっているのはわかっていましたが、まさかこんなにあっけなく崩壊するとは全く思いませんでした。その崩壊に至る過程で、なぜ崩壊したのか。

先ほどウクライナ西部の問題を言いました。でも私は一番の理由はロシアだと思います。ソビエト連邦崩壊の主犯はロシア、従犯はウクライナというのが私の見立てです。

1990年6月12日にロシア主権宣言が採択されました。その時、ソビエト最大の共和国、ロシア共和国でエリツィン大統領が選出されました。ロシア共和国にゴルバチョフ大統領の意のままにならない政府が誕生したことを意味していました。正直言って、ソビエト連邦で主権宣言というのはどういう意味だということです。でもこれでソビエト連邦の崩壊に対してロシアが引き金を引いたわけです。ロシアがこの最初の主権宣言をし、その後にウクライナが続いた、つまりロシアがソビエト連邦崩壊の号砲をひいたのです。ソビエト連邦崩壊まではエリツィンのロシアと、クラフチュクのウクライナは協力したのです。ゴルバチョフのソビエト連邦をなくすために協力したのです。その結果が最後、12月8日になった。ただ、思惑の違いはありました。崩壊したあと、ロシアはできるだけソビエト連邦のようには言いませんが、共同体の枠組みの中でロシアの求心力を高めた。それに対してウクライナは、共同体と言うのは、これから離れていくための離婚協議機関で、すぐに離れることはできないから、時間をかけて離婚していくというものです。ロシアはその共同体の枠内で統合を強めたい、その思惑の違いは最初からあったわけです。それが共同体の合意文書に現れています。これは、いわばウクライナの当時の代表団を罠にかけたのです。「共同体の枠内で、相互の領土の一体性と国境線の不可侵を尊重する」。共同体の合意で一番重要なのは、ソビエト時代の各共和国間の境界を国境線とするという基本合意なのです。けれどもそこに、ロシア代表団は共同体の枠内で、つまりオタクが共同体から出れば、この合意はチャラよ、こういうものを入れていたわけです。ただそういうことはありましたけれども、一応ほぼ流血がなくソビエト連邦が崩壊した。ほぼと言いましたが、いろいろな地域紛争はありました。アルメニア、アゼルバイジャンとか非常に凄惨なのはありましたが、大きなところの紛争はありませんでした。それはやはり、この当時のエリツィンにしてもクラフチュクにしても、ユーゴスラビアのような内乱に陥ってはいけないと思っていましたし、あとアメリカが強力にプッシュしていたのです。当時ユーゴスラビア連邦が崩壊しました。セルビアとクロアチアを中心に内戦、つまりソビエト連邦にとってセルビアはロ

シア、クロアチアがウクライナ、これがそのまま起きたのです。核兵器を持った国同士の内戦となると、これはもうアメリカが必死になってそういうことが起きないようにということで走り回ったわけです。

私はソビエト連邦崩壊後の本当に苦しい時期での各国の歩みについては同情的です。何が苦しいかというと、ソビエト連邦というのは中央集権的です。これは資本主義だったらまだいいのですが、全く社会主義体制、また市場経済というものを70年間やってなかった、いきなりバラバラになったということ、つまり、経済改革もやらなければならない、国と言っても省庁は全部ソビエトにありますから、お金、財務省とかを作らなければいけない。軍隊とかは駐留していたのを分割できますが、ソビエト連邦の省庁を引き継いだロシア以外の国は非常に苦しいのです。だからウクライナも自分の通貨を作ったのは5年後です。それまではルーブルとかロシアのクーポンを使うわけです。他の国も同じです。非常に苦しいことで、今の戦争というものを考えると、あの時国際社会、アメリカ、ヨーロッパは喜び過ぎたと思います。ゴルバチョフはまだ続くと思っていたのです。冷戦終結に至る合意は、ほぼ欧米とソビエトとの合意なのです。だからソビエト連邦が崩壊した時にもう一度集まって、安全保障の枠組みをしっかりとソビエト連邦崩壊という現実に合わせて作るべきだったのです。当時であれば、ウクライナは憲法において中立を明記していました。だからこの時にしっかりと作っておけば、いろんないざごはあったけれど、ここまでの戦争には至らなかったのではないかという気がします。特に、当時の取材経験で最も一番関心があったのは核不拡散です。ソビエト連邦が崩壊して核兵器はどうなるのか、これは非常に大事な問題でそれは取り組まなければいけないのは当然ですが、そこだけに集中してしまいました。93年にウクライナが核兵器を放棄する、94年1月ブダペスト合意という覚書が結ばれる。私はそれまで何度も何度もウクライナに行っていたのです。けれども、核兵器の問題が解決したら、ロシアもチェチェン紛争とかで大変でしたから、ウクライナのことをしばらく忘れてしまいました。ウクライナに取材に行くことも少なくなりました。本当はそこから、ウクライナが核兵器を放棄した段階でウクライナ、ベラルーシ、ロシアというものの安全保障の枠組みを考えるべきでした。アメリカを含めてそのところを本気で考えることを忘れてしまったわけです。

あとはプーチン時代、今もってプーチンが支持を受けているのは、先ほど述べたように90年代あるいは20世紀は戦争と革命の世紀、なぜプーチンが我々にとってはこれだけ悪の権化と見られるのに、ロシア国民に支持されているかというと、安定させたということです。つまりロシア国民にとっては、20世紀というのはひどい世紀だった、最後の10年間もひどかった。それに比べれば生活が安定して、世の中が安定したということが大きいのです。ただ、ロシアにとってプーチンはウクライナの侵攻あるいは2014年以来、大きな誤りを犯してロシアはまたチャンス逃したのではないかということです。私は憲法の前文はよくできていると思います。自分は国民国家ではない、いろいろな民族がいる、いろいろな人がいる、いろいろな歴史を辿ってきて今ここにいるわれわれは団結しようというので前文にはロシアの口の字もありません。つまりロシアというものを出すと崩壊する、ユーゴスラビアの二の舞、ソビエト連邦の二の舞になる可能性がある。だからロシアということだけでなく、我々はこの歴史を、いろいろお互いにあるのだけれども共有するんだということで

す。

ロシアというものは、クルチェフスキーというロシアの歴史家によると、植民によって国土を拡大した国であって、土着の支配層を取り込んでできた多民族国家、アメリカがサラダボールと言うのに対して、ロシアは土着のエリートです。ロシア人を中心に例えばジョージアであるとかチェチェンであるとかタタールを取り込んでいくという形です。ロシアの友人で経済政策をやったアナトーリ・チュバイスのお兄さんでイーゴリ・チュバイスという哲学者がいて、彼の発言、見方に同意するところですが、21世紀になってロシアがなぜ崩壊したのか、なぜ二度崩壊したのか、それぞれ理由はありますが、つまり国土の拡大によって国を維持するというのがロシア帝国以来のロシアの成り立ちだったわけですが、その拡大によって維持していくという方向性はもうだめだ、限界に達したから二度崩壊したということです。だからこれからは国の外への拡大ではなくて、崩壊したのだけれども、まだ十分広いので、このロシアの内側を建設していくべきだとの考えです。私はこれは正しいと思いました。つまりロシアは確かにいろいろあるけれども、偉大な国である。けれども、貧しい人々が住む偉大な国なのです。人々は貧しいが国は偉大だという時代をやめて、豊かな人々が住む豊かな国になるべきではないかという考え方です。ロシア人に対して、なぜお前たちは豊かにならないんだ、なぜ貧しいままで我慢しているんだ、これだけそれなりに有能な人間、科学技術の素養もある、資源がある、食料も困ることはない、なぜこの豊かさを個人個人が求めないのかと聞いたところ、国の偉大さだけを求めるのだという答えが返ってきました。僕はプーチンが出てきた時、そちらの方向に行くのではないかと考えていました。そういう傾向もあったプーチンは、初期においては10年間にGDPを2倍にするとか豊かさというものを打ち出していました。だから国民の支持を得たということです。保守主義、保守的なロシア、私は保守的なロシアでも全然構わないと思います。保守的なものというのは、本来は外に拡大するということではないと思います。内を大事にしていくというのが保守的なもの、そういう方向になればいいと思ったわけです。しかしながら、どうも途中から、また拡大ということで拡張的なロシアの道を選んでしまったわけです。せっかく21世紀に変わった時に、ソビエト連邦が崩壊した後の混乱が収まって、ある程度経済成長もする基盤ができて、資源高にも恵まれて、チャンスというものがロシアにとってあったし、世界にとってもありましたが、それが今回のウクライナへの軍事侵攻ということで再び失ってしまったわけです。だから結果的には、ロシアというものが、ちょっと何年たつか分かりませんが再び混乱するということもあるかもしれないということです。

最後にロシア軍とウクライナの軍のどちらが勝つか、これは分かりません。相互に強み弱みというのがありますが、ウクライナ軍の強みはやはりNATOの訓練を受けて判断が早い、情報の速度が速い、士気が高いということ、それに対してロシアの強みというのは、やはり国力です。国力、人口にして1億4000万対今のウクライナ政府が実効支配しているのは3000万ぐらいでしょうから、1億4000万対3000万の違いがある、あとエネルギー、食糧にロシアは困らない。確かに半導体とか足りないというのがありますが、それも自力で作るものがある。ウクライナの場合は背後にいるアメリカ、ヨーロッパ、これがどこまで支援ができるのかというところが鍵になるという感じがします。あと世界ということになると、やはり戦争の結果がどうあろうとも、やはりアメ

リカ中心ということがやはり変わってくるのではないかと思います。アメリカというのは強大な国であり、一つの世界の中心であり続けるとは思いますが、この今回のロシアへの態度、私とかNHK含めて、我々は、国際社会はロシアに対して厳しい態度を取る、制裁を加えていると申しますけれども、加えてない国もそれなりにいるわけです。その典型が中国、インドであり、ASEANもかなり加えていません。それからサウジアラビアです。私にとって驚きなのは、ソビエト連邦が崩壊した時に、サウジアラビアがアメリカの要請に従って、大増産、石油、原油を増産して原油価格を引き下げることによって、ソビエト連邦の体力を奪っていったということがありましたが、今、サウジアラビアのムハマド皇太子はプーチンと手を握って生産を増やそうとしない。来年はBRICSが拡大していく。そうするとG7とBRICSというものの中心というものが見えにくい世界になってきています。そこに最後にパレスチナ、イスラエルということになって、なかなか油断のできない危ない時代になってきたのかなということです。本当に心配されるのはこうした世界の不安定さというものが、我々の北東アジアにどう影響してくるのかということです。プーチンはおそらく来年北朝鮮を訪問するのではないかという気がしています。この間ラブロフも行っていますし、ロシアはおそらく制裁を無視すると決めたのだと思います。北朝鮮との関係を、同盟関係とまでは言わないけれど、制裁が無い正常な二国間の関係強化、戦略的パートナーとする。そこに中国がどう関わってくるかという問題が出てきますけれども、ロシア、中国それに不安要素として北朝鮮というものがある中に対して、日米韓、そして台湾海峡、これはどうなのかということです。だから、ちょっとペルシャ湾というかパレスチナの状況が、イスラエルとパレスチナの問題だけに留まるかどうかというのをここ数ヶ月は注視しなければいけないと思っております。ご清聴ありがとうございました。